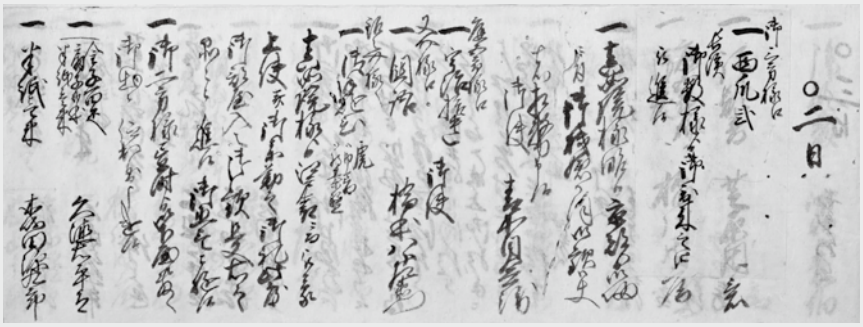
彦根城博物館だより

Hikone Castle Museum News 2024.12.1 147

資料紹介

広小路御屋鋪御留帳

当館蔵



彦根藩井伊家の庶子（世継以外の男子）が居住した彦根城下の広小路屋敷に勤めた役人が記した天明三年（一七八三）の職務日誌。同屋敷に居住した十代直幸の七男庭五郎・九男又介・十六男銀之介の武術稽古や外出など、日々の活動が記録されています。写真の七月二日条には、家族間の贈答について記されています。義祖母の真如院からは、庶子の好みや年齢に合わせて、和文を好む庭五郎へは「宇治拾遺物語」、漢学を好む又介へは中国の史書「国語」、幼い銀之介へは玩具が贈られています。また、庶子から、広小路屋敷の庭でとれた栗を江戸の直幸と正室梅暁院へ贈ることもありました。これらの贈答からは、家族・親族の人間関係や相手への思いやりを垣間見ることができます。

＊本作品はテーマ展「大名家族の日常」で展示します。

カレンダー＆インフォメーション

12月

11/23▸▸12/24 テーマ展 大名家族の日常 ―儀礼から遊興まで―

＊博物館のお正月＊

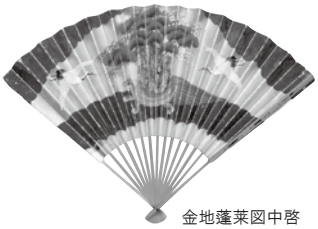
当館の正月行事「具足飾」の展示を、1月1日（水・祝）～10日（金）の期間に行います。新年を言祝ぐテーマ展「吉祥」とあわせてご観覧ください。

具足飾

12月25日（水）～12月31日（火）年末休館

1月

1/1▸▸2/2 テーマ展 吉祥 ―招福の意匠―



金地蓬莱図中啓

11（土）14:00～ テーマ展 ギャラリートーク
講師：今中 啓太（当館学芸員）

1（土）8:30～ 催し 開館記念日イベント

令和7年2月に開館38周年を迎えるにあたり、開館記念日のイベントを開催します。当館オリジナルグッズなどの記念品をくじびきにて贈呈しますので、ぜひご参加ください！

■日時　2月1日（土）8:30～17:00
　　＊記念品が無くなり次第終了
■会場　当館講堂
＊くじびきへの参加には当日観覧券が必要

2月

2月3日（月）～2月21日（金）
リニューアル工事休館

2/22▸▸3/16 特別公開 雛と雛道具

22（土）14:00～ 特別公開 ギャラリートーク
講師：奥田 晶子（当館学芸員）

1（土）14:00～ 講演会 修理完成記念講演会「よみがえった雛人形～文化財修理の最前線～」
講師：坂田 さとこ氏（坂田墨珠堂 代表取締役社長）、奥田 晶子（当館学芸員）

井伊家13代直弼の息女弥千代（やちよ）の雛人形の修理が完了したことを記念し、修理担当事業者を招いてお話しいただきます。

■日時　3月1日（土）14:00～15:30
　　＊受付13:30～
■資料代　100円　■会場　当館講堂
■定員　50名（当日受付・先着順）

弥千代の雛

3月

3月11日（火）メンテナンス休館

16（日）13:00～ 研究会 彦根藩資料調査研究会　公開研究会「儀礼・贈答からみる殿様の姿」
登壇者：外部研究員、当館学芸員

「殿様の日常生活」の解明に向けた外部研究員との共同研究によって明らかになった表御殿における儀礼や贈答について、井伊家10代直幸（なおひで）の時期を中心に紹介します。

■日時　3月16日（日）13:00～16:30
　　＊受付12:30～
■受講料　500円　■会場　当館能舞台正面見所
■定員　60名（当日受付・先着順）

側役日記

3月17日（月）～3月19日（水）
リニューアルオープン準備休館

3/20▸▸4/20 テーマ展 井伊家と能 ―大名文化の精華―

20（木・祝）10:00～ 催し リニューアルオープン記念イベント「体感！大名家の能舞台」講師：茨木 恵美（当館学芸員）

江戸時代に建てられた由緒ある能舞台に、実際に上がることができる特別な見学会です。あわせて展覧会の解説も行います。

■日時　3月20日（木・祝）①午前の部：10:00～11:00
　　②午後の部：14:00～15:00　＊同内容
■参加費　無料（観覧料が必要）　■会場　当館展示室、能舞台
■定員　各部10名　＊事前申し込み制、応募者多数の場合は抽選
■申込方法　彦根市電子申請サービスから申込（1人1回まで）
■申込期間　2月21日（金）～3月5日（水）
＊当日は、別途オープニングセレモニーを行います

22（土）14:00～ テーマ展 ギャラリートーク
講師：茨木 恵美（当館学芸員）

編集・発行 彦根城博物館
〒522-0061 滋賀県彦根市金亀町1番1号　TEL 0749(22)6100
FAX 0749(22)6520　https://hikone-castle-museum.jp/

研究余録

金亀玉鶴

江戸の彦根藩邸における足軽と火消

江戸時代、井伊家は千人を超える足軽を召し抱え、彦根藩士の物頭役（足軽大将）に統率させました。彦根藩の足軽は、戦時には歩兵として弓や鉄砲を用いて戦い、平時には彦根城の石垣修復や、藩内の諸役所に出向して藩政の実務に従事するなど、様々な形で彦根藩を支えたことが知られています。

また、彼らは彦根だけではなく、彦根藩が江戸に構えた藩邸である上屋敷（現東京都千代田区永田町）・中屋敷（現千代田区紀尾井町）・八丁堀屋敷（現中央区入船・新富）でも働いていました。享保十年（一七二五）頃の江戸藩邸の様子を記した「江戸御足軽名書組附」（個人蔵）によると、江戸に詰めた足軽は三人の物頭のもとに分けられ、上屋敷・中屋敷にはそれぞれ五十五人、八丁堀屋敷には二十九人が配されたことが確認できます。そこで彼らは、屋敷の門番や番所の番人、屋敷内の他部署に出向して実務を行うなど、江戸でも様々な役割を担いました。その中で特に重要視された仕事が火事への対応でした。江戸城を中心に、広大な大名屋敷や町屋敷が群集する江戸では、火事が頻発しており、それへの対応策が不可欠だったのです。

江戸詰手鑑

彦根藩が江戸の藩邸に常時足軽を配するようになったのは明暦三年（一六五七）のことです。同年に発生した明暦の大火により、彦根藩は上屋敷が被災し、その経験から彦根で火消業務を担っていた足軽を江戸に呼び寄せ、防火・消火にあたらせることにしたのです。その後、人数の推移はありますが、概ね百人から百五十人程度の足軽を江戸に常駐させ、彼らを中核とした火消集団を組織して火事に備えました。

こうした藩独自の火消組織は、加賀藩前田家が召し抱えた町方の鳶を中心とする火消集団である加賀鳶をはじめ、江戸に藩邸を持つ諸大名のもとに作られました。火消組織がどのような働きをしていたのかは、彦根藩の足軽が江戸詰めの際のマニュアルとして安政五年（一八五八）に書き写した帳面「江戸詰手鑑」（当館蔵）からうかがうことができます。この資料によると、彼らが主として担ったのは、「三丁火消」や「見廻火消」と呼ばれる火事場への出動と、暮れ六つ（日の入り）から明け六つ（日の出）にかけて道筋を定めずに火の元を三度見回る「夜廻り」であったことがわかります。「三丁火消」というのは、藩邸から二・三丁（約三百メートル）の範囲で発生した火事に対して、各屋敷の火消組織がいち早く駆け付けて初期消火を行うよう、幕府が諸藩に命じた御用です。幕府配下の定火消（三千石から五千石の旗本が勤めた）が現場に到着した後は、彼らの指示のもと消火・防火活動にあたりました。この御用は、おざなりにすると処罰の対象となった上、複数の藩邸を持つ諸大名にとっては大きな負担となりました。また、「見廻火消」は、三丁の範囲外で発生した火事に対して、各自の火消組織を派遣するもので、彦根藩では、上屋敷から中屋敷への派遣はもちろん、他大名のもとへ駆け付ける場合もありました。

また、「江戸詰手鑑」からは、彦根藩の火消組織が、統率役を担う物頭一人、足軽二十人、中間（井伊家が召し抱えた武家奉公人）十八人らからなる集団を一組とする三組で構成され、各組が一日交代で火事に備えたことがわかります。さらに、彼らが火事場に持参する道具について書き留めた記述を見ると、足軽二十人はそれぞれ鳶口、中間十八人は拍子木や提灯、龍吐水（消火に用いる手押しポンプ）や桶などを持参したことがわかります。鳶口は、棒の先端に物を引っかける鉄製の鈎を付けたもので、火事の際には延焼の恐れのある屋敷などを取り壊すことに用いられた、江戸時代の主要な消防道具の一つです。ここから、火事場において、主として足軽は延焼防止に努め、中間は火元の消火活動に従事したことがうかがえるのです。

江戸の彦根藩邸では、足軽を中核とするこうした防火・消火体制がつくられ、幕末に至るまで機能していました。ここで注目されるのは、加賀藩前田家の火消組織などに見られる鳶などが彦根藩の火消組織の中に含まれていない点です。江戸時代中期以降、有力な諸大名の所では、足軽らの負担を軽減するため、町方から多くの鳶などが召し抱えられ、防火・消火体制の中核を形成するようになりました。彦根藩においても江戸に詰める足軽の負担の増大は、とりわけ幕末期に大きな問題となりましたが、火消組織の改編には至りませんでした。なぜ彦根藩は足軽を火消組織の中核に据えた原初的な編成を維持したのか、ここに他藩とは異なる、彦根藩の足軽の特性を見出す糸口があるかもしれません。

（北野智也）

展示案内

2024年12月～2025年3月

●● 常設展示 ●●

”ほんもの“との出会い

―彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に八〇点あまりを展示―

テーマ展

11/23（土・祝）▼12/24（火）

展示室1

大名家族の日常

―儀礼から遊興まで―

江戸時代、彦根の表御殿や下屋敷、江戸の屋敷に居住した彦根藩主とその家族たち。幕府や藩の儀式・年中行事に参加する傍ら、それぞれの好みに応じて、鷹狩や乗馬などの武芸を始めとして、茶の湯や和歌などの文芸に取り組んだほか、寺社参詣や祭礼見物を行うなど、公私にわたって多彩な生活を営んでいました。

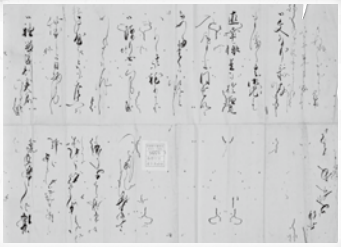
本展では、井伊家十代直幸（一七三一～一七八九）の時代を中心に、側近くに仕えた家臣の日記や奥女中が残した記録、生活を彩った調度品などから大名家族の日常に迫ります。

＊ギャラリートークは終了しました。

井伊直幸画像（部分、清涼寺蔵）

黒漆塗貝蒔絵煙草盆

馬図　井伊直幸筆



梅暁院（井伊直幸正室）書状

表御殿図（部分）

テーマ展

1/1（水・祝）▼2/2（日）

展示室1

吉祥

―招福の意匠―

松竹梅や鶴亀、鳳凰、さらには扇から唐子まで、古来より多種多様なものが、長寿や富貴、子孫繁栄などの福をもたらすめでたい存在とされてきました。それらは絵画や陶磁、染織、漆工、金工といった様々な美術工芸品の意匠に取り入れられ、愛好されてきました。

本展では、吉祥に彩られた品々を一堂に会し、新年を言祝ぎます。

◎ギャラリートーク◎

■日時　1月11日（土）14時～（30分程度）

■講師　今中啓太（当館学芸員）

唐子遊図（部分、個人蔵）

金梨地蕪蒔絵螺鈿鞍

特別公開

2/22（土）▼3/16（日）

展示室1

＊3月11日（火）は休館

雛と雛道具

安政五年（一八五八）、井伊家十三代直弼の息女弥千代（一八四六～一九二七）は、高松藩松平家世子頼聡に嫁ぎました。婚礼に際し、大揃えの婚礼調度とともに雛と雛道具が調えられました。

弥千代の雛は、近年とみに劣化が進み、展示ができない状態となっていましたが、この度、念願の修理を実施することができました。本展では、そのお披露目を兼ねて、弥千代の雛と雛道具を、地元の旧家伝来の古今雛や御殿飾りとともに公開します。

◎ギャラリートーク◎

■日時　2月22日（土）14時～（30分程度）

■講師　奥田晶子（当館学芸員）

＊関連講演会を開催します。詳細は4頁をご覧ください。

弥千代の雛道具

弥千代の雛